

〈高校生の部 佳作〉

霜月のリスタート

福井県立武生商工高等学校 木下 望杏

私には一つ下の年子の妹がいる。私達は今も「喧嘩するほど仲が良い」という言葉がぴったりな姉妹だ。小学生の頃、持ち物も習い事も全て同じで朝から晩までずっと一緒だった。そんな私達は、性格も食の好みも真逆で一番真逆だったのは足の速さだった。私は走るのが遅く体力もないが、反対に妹は走るのが速い上に体力もあったため、毎年小学校の体育大会のリレーに選ばれていた。

十一月のマラソン大会が近づき、練習が始まりだした忘れもしない小学六年生のあの日。私の小学校では一学年の人数が少ないため、低学年・中学年・高学年と二つの学年を合わせて走るため、六年生の私は五年生の妹と一緒に走ることにになった。小学生の頃は、負けず嫌いでプライドも高かったため、妹に負けると分かりながら走るのが嫌だった。練習の時に私が妹に負けているのを見て、ある一人の男の子に、

「え、のあ、妹に負けてるやん。」

と言われた。その男の子にとっては見たままの結果の何気ない一言だったかもしれないが、足の遅さがコンプレックスだった私が落ち込むには十分な一言だった。学校が終わり、習い事の時間になりいつものように私に話しかける妹に、そっけない態度をとってしまった。そして、私は妹に勝つために二つの作戦を立てた。

一つ目は妹を太らす作戦だ。いつもは喧嘩して分け合おう菓子も我慢して譲ったり、わざとご飯やおかずを多くよそってみたりした。しかし一日二日で効果が表れるわけもなく、一つ目の作戦は失敗した。

二つ目の作戦は自分の足の速さを今以上に速くする作戦だ。朝に早起きして走り込みを行おうと思ったが、私は早起きが苦手だったため、実行に移すことが出来ず失敗した。

他に実行が出来そうな作戦はないかと色々考えたが、自分がマラソン大会を休むくらいしか思い浮かばなかった。そのため、一か八かで母にマラソン大会を休みたいと言ってみた。すると、怖い顔をされて怒られたので休むことは無理だった。朝から晩まで良い方法はないかと必死に考えると、ある一つの方法を思いついた。これは私の姉としてのプライドがあるため使いたくなかったが、妹に

「マラソン大会本番手加減して私に負けてくれたら三つ言う事を聞くよ。」
と言ってみた。すると妹は、

「無理。手加減したらマラソン大会の意味ないやん。そうやって逃げてばっかりやとこの先どうするんや。」

と返ってきた。全部図星だったため、私は何も言い返せずにただ妹が言った言葉に呆然としていた。マラソン大会当日まで私は妹とどう接すればいいのか分からず、ろくに口を利かなかった。

ついにマラソン大会当日になり、最初は幼稚園、低学年とどんどん自分達が走る順番が迫ってきた。中学年が走り終わり、高学年が走る準備をする時間の中で、妹が私に、

「のあちゃん、お互い頑張ろうね。」

と声をかけてきた。皆が緊張して自分のことしか見えない中で、私を気にかけて声をかけてくれた妹の優しさに涙が出そうだった。本番、先生のピストルの合図で一斉に走り出した。見に来てくれている家族が大きな声で応援してくれているのを見て、マラソン大会を休みたいと言っていた自分が恥ずかしくなった。練習では前に走っていた子を追い越すことが出来たけれど、妹はまだまだ先にいた。いつもは諦めて歩いてしまう道も、諦めずに最後まで走り切ることが出来た。結果的には、負けてしまったけれど、自分の自己ベストタイムを更新することが出来た。私の学校では自己ベストタイムを更新すると小さな賞状がもらえるのだが、六年間で初めてもらうことが出来た。最初で最後の賞状はすごく重いように感じた。

家に帰り、家族の皆に賞状を見せるとすごく喜んで褒めてくれた。妹は、入賞していたため、私よりもはるかに大きくきらびやかな賞状を持っていたが、誰よりも私の賞状に喜んでくれ、とても嬉しかった。あのまま妹が私の負けてほしいという要望に応えていたら、大人になるまで後悔していたと今になって思う。だから、あの時妹が断ってくれて正々堂々と勝負が出来て本当に良かった。今、この話を笑い話で話せているのは、他でもない妹のおかげだ。だから妹が私の妹でいてくれることに、感謝したい。